

日本人初の幼稚園保母

水戸市松本町に水戸藩時代の士族の墓所、常磐共有墓地がある。幕末の志士の一人、豊田小太郎(号は香窓)と並んで妻、豊田芙雄(1845-1941)の墓がある。近くには、親類でもある幕末水戸藩の学者一家、藤田幽谷や東湖の墓がある。

志士たちの墓碑が立ち並ぶ中であって、芙雄の墓碑銘は勇ましいものではない。しかし、国内外に胸を張れる文字が刻まれている。「日本の保母第一号」の称号である。その生涯をたどると、芙雄こそ「天下の魁」にふさわしい人物といえる。

芙雄は、水戸藩士、桑原治兵衛と雪子の二女として水戸に生まれた。幼名は冬。母親の雪子は藤田幽谷の二女で、冬に詩歌の読み聞かせや和歌の作り方を教えた、という。冬は教養豊かな家庭で育てられた。

文久二年(1862)、冬は豊田小太郎と結婚した。18歳の時である。嫁ぎ先の豊田家も学者一家で、小太郎の父、天功は彰考館総裁、

小太郎も彰考館総裁代を務めた。しかし、尊王開国論に進んだ小太郎は京都で暗殺されてしまう。

夫の悲報を知った冬は、一大決心をする。名を芙雄と変えたのだ。以後、夫の最後の言葉とされる「心を鬼にしておれ」を胸に秘め、自らの道を歩み始めた。向かった先は教育の世界だった。

明治6年(1873)、水戸に五軒小学校(現水戸市立五軒小学校)が開校されると、女子部として発桜女学校(現在は閉鎖)が開校された。芙雄は同女学校の教員となり、明治8年(1875)に茨城県から「小学少訓導試補」の辞令を受けた。しかし、芙雄は同女学校を辞め、上京する。

明治8年、東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)の教員採用試験に合格。ここから芙雄の飛躍が始まった。翌9年(1876)、附属幼稚園(現お茶の水女子大学附属幼稚園)が開校されると、幼稚園保母の辞令を受けた。日本人初の保母の誕生である。

豊田芙雄

Fuyoda Fuyū

芙雄の才能を見抜いての抜擢だった。幼稚園教育は世界で初めて幼稚園を開校したドイツ人教育学者、フリードリヒ・フレーベルが唱えたフレーベル主義で進められた。「五感を重視」し、「遊びを通して学ぶ」、「創造性を働かせる」、「相互作用の原理を大切に」などなど。どう教えたらいいか、とまどいながらも指導法を体得し、外国語の唱歌もわかりやすく改訳した。

明治12年(1879)、芙雄は国から鹿児島女子師範学校附属幼稚園(現鹿児島大学教育学部附属幼稚園)の設立を援助するため、鹿児島県に派遣される。一年余にわたって指導をしている。

東京に戻った芙雄は、明治20年(1887)、水戸徳川家12代当主徳川篤敬がイタリア全権公使として渡欧する際、随行員に選ばれた。明治22年(1889)に帰国するまで欧州の女子教育や家庭教育を調査している。

この後、栃木県高等女学校(現栃木県立宇都宮女子高等学校)や茨城県高等女学校(現茨城県立水戸第二高等学校)に赴任。水戸市大成女学校(現大成女子高等学校)の校長になった。

昭和12年(1937)、芙雄は、米国の視覚・聴覚の重複障害者であったヘレン・ケラーが茨城県を訪れた際、水戸駅で出迎えている。教育者として道を拓いた者同士の出会いであった。(文中敬称略)

主な参考文献

『日本人初の幼稚園保母 豊田芙雄～幼児・女子教育に捧げた97年の生涯～』(2012年10月、大洗町幕末と明治の博物館編集・発行)、『水戸の先人たち』(2010年3月、水戸市教育委員会発行)など。



茨城県立水戸第二高等学校正門脇に建つ豊田芙雄の銅像＝水戸市大町二丁目(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「人をつくる学問」のヒント